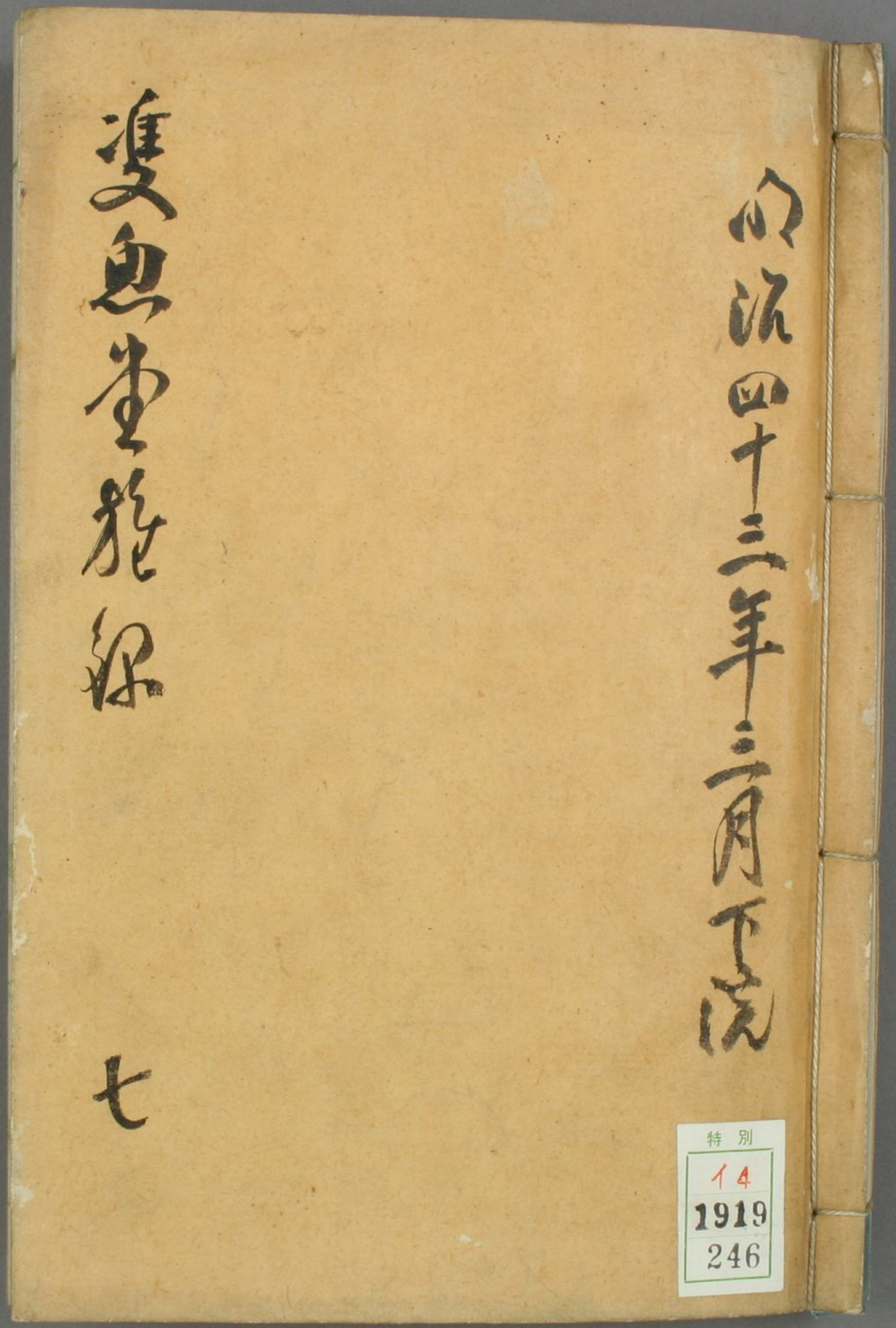


明治四十三年三月下院

雙魚堂雜錄

七

特別
イ4
1919
246

38- 9058

176521

雙恵堂雜録卷七

四日四十三年三月下院

○大坂に三四ヶ月滞在候ゆゑ二度ハ此ころ三河へ行る河原志ひ〻〻遠ざかりに御の高木骨董補ゆ持ちもいろ〻のものを漁る内其家に雖も垂きを垂ゐ古銅器一個を見しに其り價を買ふは僅ゆ中国に七日之ゆゑものよく〻見んはありしと

東大寺　天平勝寶四壬辰十月　日

國書刊行會

の銘あるも、数ヶ年しを先づ僧を拂ひ徐ろに
主人をこんを何と思ひ知と思ひ知ぬは、うちこの
を蓋の切りしこのうちんと云ふ余をさるこの
をあらうこんを来大寺遣什しを容易な
らぬこの也銘も明らかに天平とありて考作
其時のこの義のべくもあらずと伝つて直
ひに鑑賞するに主人も如何を刻山家の切る
に氣ひつき是ん全く天の貴客を書する
也実に氣のさうしを迂濶なりし千
円の價あるこのをいかト十円なりも足らぬ價

をもお譲りしなるを不完なるも備し他の者
の手を入らず眼識高く跡を無ん
せらるし貴客の手をみるしを此品の書と
謂の命しと別るとなんて惜む拾るも
なる余の仕合を賀しけるも主人の語るを受
けば勝俗の不能とをふぬなるも云る事よ
り出なるもの三十円乾平ごとく三脚の香
煙体のこの用途に雷仮あるも其下る縦
行刻字あるも表面の古るも掬まべし惜む
べし縁一途のしく銘の損あるも終補し

國書刊行會
國書刊行會

國書刊行會

て後いとて歳月を経過したる跡見あれ
内部まで自然の渤隔しなるまを二個修補し
なるまあるも、外部まで似因ようなる点なるも
何人うえしく外を入れなるらしく外のリブ
意面に所着しされも出で内部自然の古
色を損しなるを惜まれ又て修りあるも
保し天平代の遺什の皆な國寶とせら
まゝ今日いうび貴々重んせさるを得べき余を
いくなれば幸運を祝しごゝに其の所よし
を略紀すと云ふ

明治四十三年三月念日誌

一 正殿高板高垣なるも嬉しん此二面の古境
の内一面に読みうくき華押のことキこの
刻しあるも偶々桂洲村来訪其の指の第の
女真文字に獨逸譯を附したる辞典に
就て字を訪ひ得るなるに兀剌を花押
式花文字体に書きなるとも判明しなるも兀剌
は金代の姓なり「ウラ」とよむ所る女真
文字のあるよりも推すも金代のそのなるこ
と命に明瞭にすべきなり

國書刊行會

早稲田大學圖書館用箋

汶

（歴代地理志韻所載）

○地圖ニテ遼東平ニ出シ内

東漢ニテハ　縣　遼州遼東郡

晋ニテハ　縣　平州遼東國

（今）清ニテハ　「闕按書在盛京境」

泰

○地圖ニテハ叢ニ出シ内ニ在ル様ニ作

遼ニテハ　州　上京道（今）郭爾羅斯治

金ニテハ　州　北京路（今）科爾沁左翼前横治

元ニテハ　州　遼陽省東寧路（今）朝鮮平安道平壌府西北

遼代ト金代ニテハ臣高大差ナリ

元代ト方ハ朝鮮ニ付別物ナルヒト云ヘル

境面の刻字や汶州泰州とあるも誠之を北諸を要するに在る載する所のみし当納書を要すれども且ここにきつけおく

○近獲天平香煙の大さ刻字、粗拓なんど一応面目を窺ひ得べきるつき左に収む

國書刊行會

東大寺天平勝宝

四

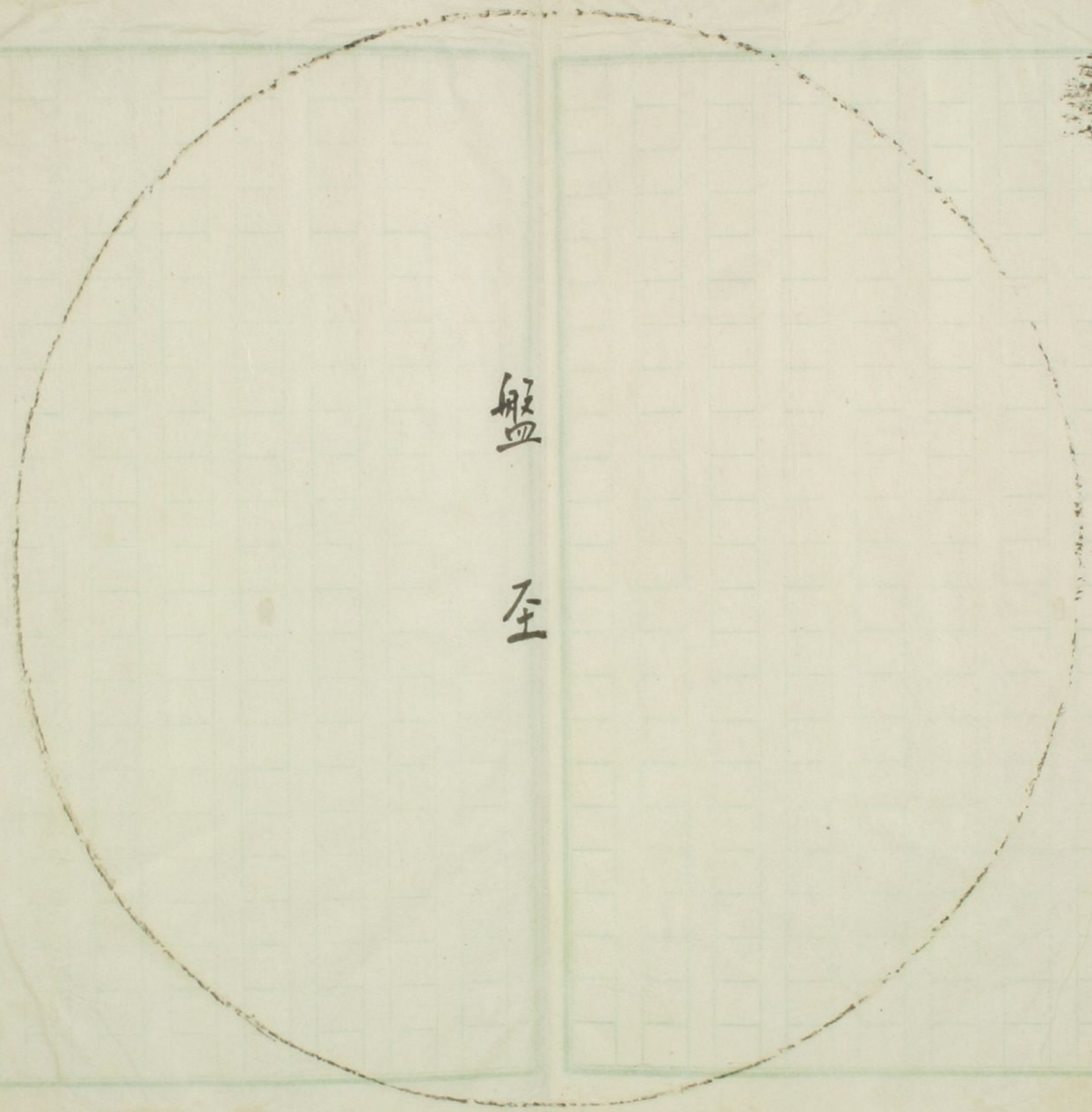
壬辰

紋

十月日

脚

國書刊行會



國會圖書館藏
國會圖書館藏

藝談　桐竹紋十郎

歌舞伎と人形（八）

菊五郎の注文―人形振りに困る―翠月の文樂座―悪多太子と阿羅々仙人

三十五年の八月でしたとか記憶して居りますが私が東京へ參りますと一日菊五郎さんが見物にみえまして歌舞伎の方には人形振といふのがあるが誰人が遣つても如何しても旨く行かないから一つ手本に俳優をつかつて貰ひ度いと思ふが如何だらうといふ御相談でした、處で私はこれまで人形を遣つて人間の眞似は斷えず仕て來ましたのですが未だ人間をつかつて人形の眞似を仕た事がございませんから是れは如何御返事が出來かねますといつて一旦は謝絶りましたが爾う言はずに兎も角も遣つてみて貰ひ度いといふ強ての御注文ですから何樣ものが出來るか知りませんがマア試驗のために一つ遣つて見る事に仕ませう」といつて其處で菊五郎さんと相談しまして尾上菊二といつて十六七の子供でしたが矢張り菊五郎さんの弟子で踊の下地は極綺麗な顏だ。

も充分にあり

といふので其の小供を選り抜て之れに久松町の明治座で例の菊五郎さんの事ですから素晴しい大道具をつかつて演たのでございましたが何しろ木で作た人形を動すのとは違つて身體の軟いぐにやぐにやの人間を枯木のやうな具合にして見せるのですから如何しても呼吸が旨く靈に吻しまして此樣をは最う一度とふたゝびするものぢや無いと云つて菊五郎さんと笑つて咄した事がございましたが成程考へて見ますと菊五郎さんが言つた通り人形振の芝居も度々見たが如何も形の惡いもので是は私が人間を動かさうとして苦んだのと同樣、元來畫のまるで違つたものを一緒にして遣らうといふのですから旨く行きさうな筈がございません。

來月の文樂は珍しいものが出まして釋迦如來誕生會といふ淨瑠璃ですが是れは御案内の通り近松さんの作の中でも殊に淋しいものですから成可く御客を倦せないやうにと云ふので西遊記を綯交にしてこれまで演じて來たのですが本年は大掾さんの師匠であつた三代目の野澤吉兵衛さんの五十年忌に切當しますので其追善にといつて此の淨瑠璃を自井さんが選んだのだうですが近松さんの原作には吉兵衛さんが苦心して筋附けを仕てあるから同じ事なら西遊記をとつて了つて原作通りにやつて貰ひ度いと云ふ御注文です其

日もくれ文樂座に行きて
人形振を見る事多かりき
筆の行きとゞかぬ事を述べ
てみれば、そうくれは興味を
引かぬ事二三節を存ずる
とぞ

明治四十三年三月廿六日

大阪巻中　義

れで大掾さんも師匠の事ではあり道行の場にも顔を出して越路と二人でやるから是非私にも出てもらひ度いといふお話ですが私もこれまで七八遍も此の浄瑠璃を手掛けて居りますが近松さんの**原作**

といふのは未だ手心がございませんし太夫の方でも如何いふ風に語つて可いのか見當がつかぬといふやうな次第で一同が大麻胡つきでやつてゐるのですが差詰め悉多太子と阿羅々仙人を勤める私にとつては此の道行を如何いふ具合にやつたものかといふ心配が湧て來ました。

●歌舞伎と人形（十）

悉達太子の苦心＝泣くに泣れず＝魯文翁を訪ふ＝蓮の草履＝阿羅々と景清

悉達太子は榮三が勤めることになつて居りますが道行の場は是非私にやれといふ御註文で其れで色々と考へてみましたが道行といつても今回のは女が一人出るでは無し車匿といふ御者が馬を牽て來て是れが悉多太子と訣別を惜まうといふのですから色氣も何も有つたものぢやございません

マア**舞臺面は鹽原太助といつたやうな具合のものです**然し困つた事には衆生濟度のために山へ上つて修行しやうといふお釋迦さまですから如何に訣別が悲しいといつて爾う女々しう泣てばかり居る譯にも行ません車匿と金泥駒が互に訣別を惜で泣くと悉達太子も涙にくれつつ御教訓なさるといふ事は近松さんの本文にも見えて居りますが其の愁嘆が凡夫の樣に見えては大變です、其處へ行くと鹽原太助などは甘いもので泣かうが笑はうが其樣ことには一向頓著が無い只舞臺が面白く見えさへすれば其れで宜いのですが悉多太子の方は爾う云ふ具合に行きませんから何とかして具合よう馬をつかつてお客さまの泣けるやうにしたいと恁う考へて居るのでございます何時頃の事でしたか最う餘程舊いことですが私が東京へ參りました時に新場の小安といつた名高い俠客について新富町の假名垣魯文さんの許へ行きましたが何しろ御居間の襖に法華經の普門品を貼交にして喜んでゐようといふ程の御方ですから御道具などにも隨分變つたものが多いのでございます、すると**魯文さんが庭前にあつた蓮の草履を指し**て儂が何故この草履を穿いてゐるか卿それを知つてゐるかいとのお尋ねでしたけれど素より私は心得ません事ですから有體に申上げますと是れはお釋迦さまが御修行中に跣足で歩いたら小さな蟲が遁場を失つて踏殺されうも知れぬ切めて蓮の草履でも穿たら眼に見えぬ蟲を踏殺すやうなこともあるまいと恁ういふお考んでお穿き被成れたのがこの蓮の草履だ何かの役に立つ事があるかも知れないから咄して置くのだと親切に敎へて下さいましたが今回の出物には持つて來いといふ所ですから私は一つ魯文さんの智惠を拜借して山上での御修行にはこの草履を用ひますが悉達太子といつて居らつしやる間は未だ其處へお氣の附かぬものとして山へお上りなさる時にも跣足といふことに仕度いと考へて居ります阿羅々仙人の首は日向島の景清につかふのを用ひまする積で是れは最う四度私の手にかけた首て大體は檜で作るのですか是れは桐の丸彫にして上に肉色の縮緬を貼つてあります他の人形とは違つて眼の具合が大切でございますから特に縮緬をつかつてありますので何うか舞臺か好い鹽梅に行つて呉れゝば宜いがと只其れば かりを心配して居るのでございます。（完）次は

國書刊行會

國書刊行會

と思ふる湖南は一條天皇の高さ
と云へり　山中信天の舊義とす

一　五山版
音注孟子
五山版とは極めて稀覯のもの博
むらくは首尾二十三あるとも中
世鈔けなるも

一　五山版
冷齋物語
余の近代の本物もしくは同じ

國書刊行會

ものゝ余は極高の印あるも、これは
意好もなくウブなる所なしはと
も紙を極めて薄く粗也

一　樂学軌範　三冊
朝鮮本にて一冊樂器の図を
載す珍しく覚ゆ

一　貞觀政要
異本　宮本　列蝶とも
松下見林の範本
書信を以つて案ずるに見林氏の

國書刊行會

の像を画くまゝ此の元版據る[illegible]
に送るこのありと見えたるも
主人の行ひて羅振玉の言を六の撮れる例の佛
政府の通事支那の[illegible]る敦煌石室寸
の古文書をうれる、彼の版刻多羅尼の言
其も見しが長さ二尺二三寸位幅八九寸
位のこのうち經界あり[illegible]り經の書体も
[illegible]の版のことき説あるも内のある書なるも
[illegible]五代の頃の版刻の[illegible]
丈三寸五六分幅二尺許のこのうちて漢嚴なる

楷書なるも日本の寶龜頃の[illegible]
時代若きも而もきこのなり
主人の話しに佛書の此の[illegible]見をなしたる[illegible]
即自身[illegible]当時通りたる[illegible]更なる六千[illegible]
を獲たりとて此の内の[illegible]このあるこの[illegible]
[illegible]前の[illegible]比して[illegible]
[illegible]
主人又云く西本願寺法[illegible]西域を[illegible]見し[illegible]
る古文書の[illegible]隨行の人[illegible]寄せ[illegible]
[illegible]の[illegible]前に早く[illegible]の出

國書刊行會
國書刊行會

あるやうも覚ハる、又光明皇后の義之の手
本ハ就て学ハんとて其の楽毅論の書を
取りて之れに影照して見ると大いに故を同じ
する所も見受くる推ふに義之の楷書を
略々ユンタ句合のこゝのなりしなるべし、天平
頃の言語の書なども此の頃の書なるも淵源す
るらしく思ハん、いろいろに研究すれば
くに興味を感ずる、終に紫栗山ハ寶
ぬ者調べ日の命を受けて古社寺を故
考し正倉院の楽毅論や王勃云々の

断簡なども見れるに相違なければ栗山の
書風も或は楽毅論や王勃などに淵源
するものなる一つとす、現に讃岐にて此説行
ハるとて王勃云々の断簡を何人の書な
るを知らずと答ふも言語をなすの書とて見
へず光明皇后の楽毅論と第一段同じき
様に見受くる所あれば或は同時の書なるも
知る可らずなど思ひ得し合ひとなり
○古墨蹟を云ふまでもなく正しき来歴の
ものを標準とせざるは真贋利鈍わか

國書刊行會
國書刊行會

國書刊行會

んで其の精神の本を定めようとしたとも
慨然に堪へず、思ふに此書出でゝ諸家の廣
れに大惑亂を與へ、骨董界に大恐慌
を惹き起すことのあらん

○曹全碑拓本の見方に付小川簡堂主人舊刻
ほ乾の字の扁草とあるも若うき刻ほ扁
車とあるもあるとも未だ實物に就て語と
す且しく記し置く

○西村天囚近ごろ備前芳烈公手寫の論語
を雜ぶて跋をすとやうも木下順庵自筆

の序あるもとやうく未だ見ず

○定武本蘭亭は支那にも王羲之の真の面
目をもつの惟一の法帖と云ひて居る我も
精逐良の臨書し給ふ神陵本蘭亭こそ
却かて定武より優ることの世との議論を生
し給ふ其の動機は敦煌石室より見えさ
んとする唐太宗の第を唐代に刻し此帖を
其の動機にある太宗は實世南補逐
良の書を學び又特に羲之の書を崇拜
した人にあるから其の唐刻の正しき太宗

國書刊行會

蘭醫書展覽會

東京醫家先哲遺蹟會の催に係る蘭法醫書展覽會は廿九日より京都市岡崎町府立圖書館に開かれたり出品は理化學三十有餘に分類し部數は千點以上にて醫學上頗る貴重なるのみならず趣味亦大に津々奇籍珍書殆ど堆を爲さん計りなり殊に天下一品と稱すべきは長與稱吉氏出品キュルムス解體書並に佐伯理一郎氏出品解體新書にて是は今より二百年前草野良澤、杉田玄伯氏等がキュルムス解體書により始めて腑分を爲し且つ之を飜刻せしもの當限杉田氏等は僅に七百の蘭語を縢氣に知りたるのみにて大膽にも二百四十九頁の原書を譯成したるが最初は日に一行より二行の間つゝ譯したりと故人の苦心を察するに餘りあり原書は紙表紙にて圖書は悉皆木版にて彫刻せり是れは我が飜譯書の卒先にて尼子四郎氏出品に係かる高野長英の譯したる醫源提要等は是れ亦珍とす可し次に富士川游氏出品の

西肥藩醫和山榕林澹宗建氏の著述一年痘小考なるものあり今より凡六十年前同氏がモーニッキの原書に依りて譯成したるものにて氏は右著述の外始めて之を人體に植えたるは鍋島閑叟公の姫君にて結果頗る良好なるより漸次海内に傳播するに至れり我國種痘の嚆矢なり殊に興味あるは佐久間象山の自筆の病床日記並に氏が病人を取扱ふに際し診患者の鬱れたる爲め家人の讃賞を受け止むを得ず詫書文を認めたる由にて其中には一人を救ふすべも知らずばかりる世のあだし數げきにあはざらましを一云々と認めあるなど面白し其他大槻如電翁出品蘭學椿葊の版木は同家に全部所藏する由にて其内僅に一枚を出したるに過ぎざるも是等は寧ろ日本文明を說明する標本として目す可き頗る有益のものにて要するに今回の擧は獨り醫家の見る可きのみならず我日本の西洋と交通を開始したる以來文化の變化を知らんと欲する者には隨一の研究府たること云ふ迄もなかる可し

の草のあとをそゝ神陸本の義之の書と（卽ち似る）つゝ意うちあり、そこで内藤湖南をして此の書を私藏せしめ宣武本元王のごとくとゝ大切の書畫をも内藤氏數一的次第をこゝに書き記すまでに細説を要うさん未だ遂うえの後の可否を卜しうるを待つとゝ

國書刊行會

○宗時紀をもつて黄麻紙のことき物をも質の歓
き紙にある、三聖寺住をもつて此紙に用
へられたる、これは黄硬紙とは不花の一き
居るこの心ある

○大坂清立数用をもつて何の趣味もなきに或
人と抜くに称をもつて（三月なる）後巻を分て京
都に来り彼の作家のそこを紛の何も称しき
このあし唯此白磁の大単洗 犀角の単
洗の味を窮し内の山乃樹木人物を細雕
しなる心ある見るべし惜しもべしくすりの

すくも自合アチラコチラ少なりしうるさる不あん
とも宝をも楽しも作るさんが再び出来るさ
き苦心の作也 事もつきてそれば大きさも花
瓶にあるに一見飲ことも乃ち嫁の、和に
米翁の作に倣ひ此りとる青磁目透紋の巾
頭倣古河黄土瓶の香合をも面かくいえく
ばんば嫌ひ入る清水中老間の具とをもん
と称する也 偶に同宿に心人も清水にあるを
同住称を書を称して即我をもつて海石に
まて集めあるも一二を嫁の作し作るにあら

國書刊行會

國書刊行會

す、山海の藤氏印略の跋（内書原稿）を
頼としたることを見る、高芙蓉に聞し
一任流を傳る、大要左のごとし
紫陽士ゆうて高芙蓉のるを傳る
高印を刻し意のめくとしたれば
しす、庵前に葉のつ内子後に長のれ
拾ひて麗し甍の如きを机上に陳列
しおけば高欣然として更に刀を
下すこと
こんなこんな流しである、こんなこ[illegible]

國書刊行會

所本氏の印略に題し給ふこの也　[illegible]
之、曰く家に山海小林の通約を書ける其
間あるを以て偏に茶屋を僅すこの所に
生方に貸りしなんぞ実に此は御目に
くべしと其の内容の大略は山海小林不約
の印材を欲しく思ひ自家不能の書帖
を以て之れに換刀ことをかとる小林一応
諾し終に約を含む此書簡其の通約を書
ける文にて文章頗る異ありとて不一元
を約さらしに書儀也

國書刊行會

○京都帝國大学紀念展覧会に於て見る事を得たり
り観る、宋目の手とするものを左に録す

大唐西域記　の類本錦心出ており
[illegible]　京都の[illegible]
[illegible]

南陽寺義長の
大唐西域記
[illegible]
一の[illegible]
兵庫の禪昌寺の[illegible]

[illegible]日寺の朱印合冊に接し
[illegible]
北の[illegible]
永の[illegible]
[illegible]西域記の[illegible]
[illegible]
[illegible]の奥書[illegible]
[illegible]
石山寺什の
西域記[illegible]
[illegible]
[illegible]

國書刊行會

國書刊行會

京都にはなのんいは北を正し
く且つ異なる事もありと云ふ

西域記に関係ある

慈恩寺三藏伝も

法列しあるもこれを異雅寺
なれども延久三年の宮なり
知るに聖恩院なるも西域
関係の文字なるを驚くべき
古宮を出ひ来るもなれば

三藏玄奘表路

なる筆也毋どちらの表
う手もとう未知ちくれども一
面に天平の影響あるいろく
の文言あるも表路なれば別
上所しあるも或る研究家
の説に表路宮なる方天平
よりもなしと云ふ何れにも
慈恩寺三藏伝編纂以
前の古宮本也

國書刊行會

國書刊行會

皆思説ましきもつこうとう
し所天学は西域化を研究
するにつきて内蔵湖南が捜
索し此は出しなることを言ふ
此の一部分のおもうけは大
学は於て編集せる後ハ
歴史の[illegible]帖は載せけり

地理の部は於ては
北宋歴代地理指掌図
西暦一千一百年
東坡の序あれども偽書
元祐ゝく反邦は於て
寛元の図ありし
明羅念庵廣輿図
七年 千古 二十五年
宣 千古 二十六年
利瑪竇前の地誌
丑うじやの思想を受けたる

國書刊行會

図也

北外に近来初めて日本に持ち来れる

偽齊劉韓鳥跡図

日　華夷図

石刻各一枚摺

阜昌七年（南宋紹興六年）

千百三十六年

之れを次ぐ

南宋淳祐地理図にて淳祐七年の跡あり

日本一ノ史の部にても色々の古文書陳列しありたるの無主生家不見今帝国大学の所に帰し居る鐘倉時代の文書跡に而古く載せしもの

鐘倉年代記　一冊

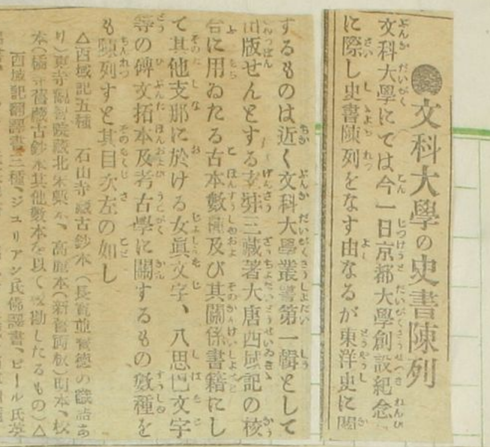
重のいろ〳〵の書きつけあるを

元徳三の重書に吉田定房ゞ

文科大學の史書陳列

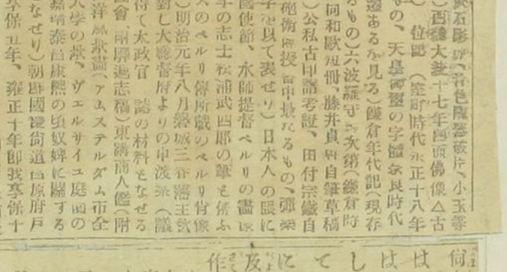
文科大學にては、今一日京都大學創設紀念に際し史書陳列をなす由なるが東洋史に關するものは近く文科大學叢書第一冊として出版せんとする支那三藏著大唐西域記の校合に用ゐたる古本數種及び其關係書籍にして其他支那に於ける女眞文字、八思巴文字等の碑文拓本及考古學に關するもの數種をも陳列すと其目次左の如し

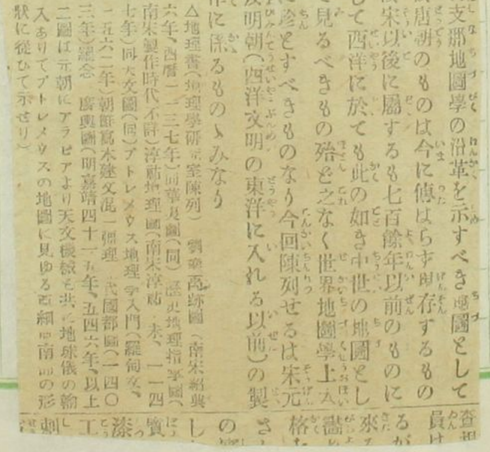
△西域記五種　石山寺藏古鈔本（長寛並實總の識語あり）東寺觀智院藏北朱點本、「高麗本（新舊兩本）」「和本」松本（編者舊藏古鈔本其他數本を以て校勘したるもの）△西域記翻譯書三種、ジュリアン氏佛譯書、ビール氏英譯書、ワッター氏英譯書（慈恩寺三藏法師傳四種共編寺藏古鈔本（延久三年寫本）高麗本（明本、享祿以前刊本△唐三藏玄奘法師表古高本　全唐文（表啓古高本の參考の爲△其他　校本各種御座記高麗本法顯傳、同南海寄歸傳、同大唐西域求法高僧傳、同往五天竺國傳寫本△碑文及拓本　國寶興女眞小字、清國河間府新府（元初皇帝詔書（八思巴蒙古字、清國山東省曲阜縣）大元加封孔子父母「詔書（八思巴蒙古字、「清國山東省曲阜縣」孟廟皇帝聖旨碑（八思巴蒙古字、清國山東省鄒縣）泰山大廟聖旨碑（八思巴蒙古字、清國山東省長清縣）靈巖守大元國師行狀碑（チベット文字、清國山東省長清縣）重興萬壽宮記碑（八思巴蒙古字、清國陝西省盩厔縣）欽錄回入覲拜寺碑記（漢、滿蒙、回四體、清國北京）△考古學に關する物　ウシュビ

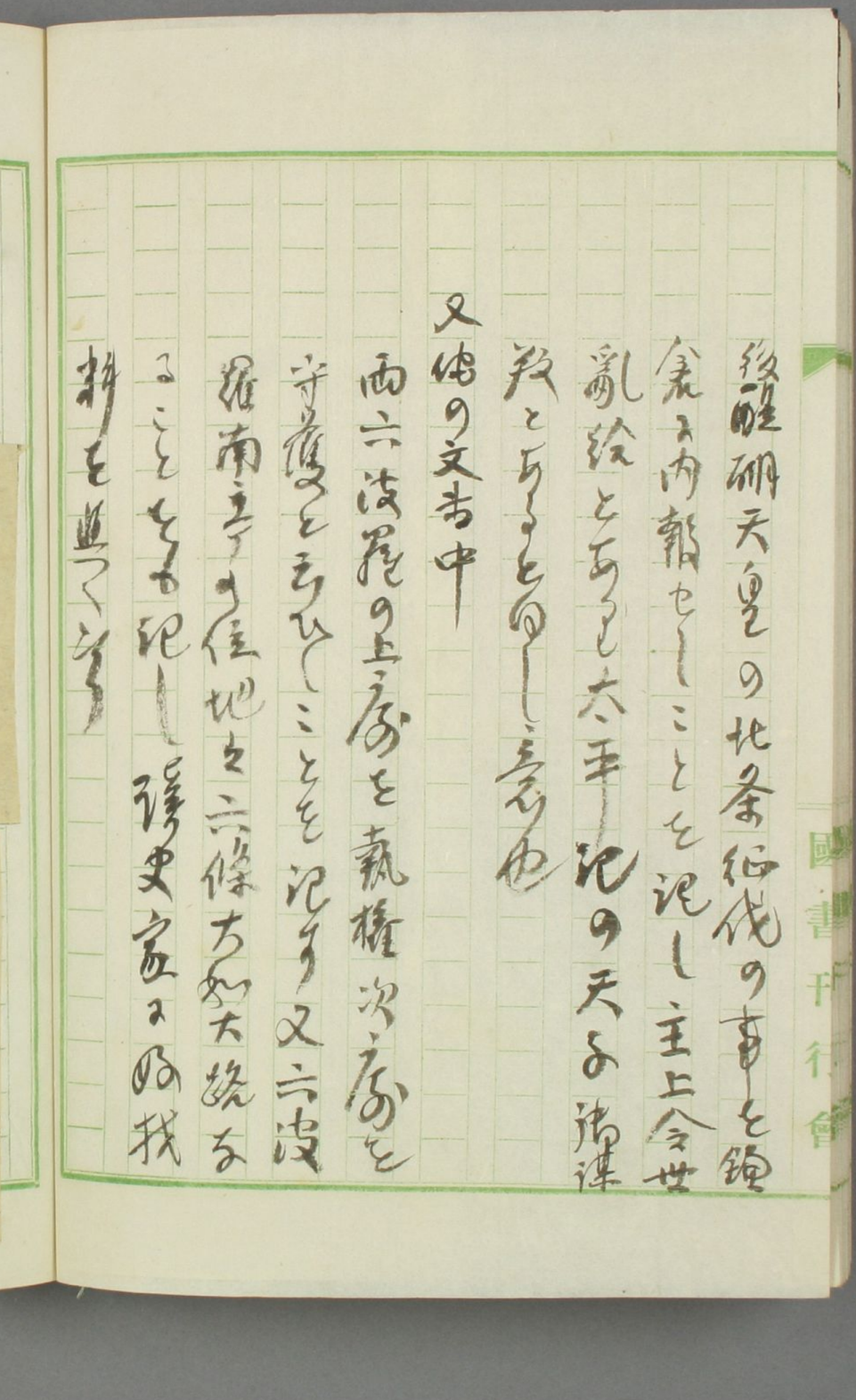


（有色陶器破片、小玉等）

文科大學にては、今一日京都大學創設紀念に際し史書陳列をなす由なるが東洋史に關







○寄宿舎の事ハ、ろ楼友高山先生ニ来り告
服部の経済話をきゝ今も出来大ニ関係
ある上此度ハ趣味ある事ありけり　即ち其の
次ぎの一二を記す　高山先生三井呉服店の
大阪支店をあづかるも洋室の衛生にうるさき

一ある日の呉服屋の習慣も今やミニ廃しき
ひとつなる、口付を忘れてはならぬ
味の淋しき習慣は廃して居る　三井でも大き
な風呂を据付けありて店員をして分引

取られ居るは之を入ることなるもいふんに居る
まゝ事ハ衛生の点よりも宜しきを一種の
習慣になるも風呂に入るを嫌ひ脱
衣する時を脱ぎ素肌で褌を締つ
てふ様ハ入らぬ様なるも居ても表時
の中に隠しその手を自ら出来ぬことになる
るのであろう
一又まく出る時ハ一定の入口を
彼を待たれやる、これハ礼儀を正すためな
めとまし向きを述べて居るやうに一種の

國書刊行會
國書刊行會

捻閑ぜある

一旧制の兵隊屋の構造は一種きつ的智識を要する建築法ひある店員の不正を矯めすぬめに建築のことき一種の有うある例くはいくら店員が又は客のうちにもお出者の場合にはぬしまず特定の一路より出でなければならぬ様に構造さんとしても、未だ日ここで改めるのひある

一坐臺の場合にはチボが比較的多くの比較である特に冬分などは外套をきた坐へるこうしたものもまるゴマカシテ又指を隠し込む、或はお縁のひなどく引きずり込む、混雑の場合に客を引受けておる事務の番頭はどこも監視が出来ぬ出場合には算盤を以つて隣せの番頭に注意するワキこうして居ると大抵は居る、又客は腰を掛け（させて）居る又指を見せるもチボの危険うまくい、大店にはぬしまず客を上げて、客の後ろを自由に心得ると通行の出来る様にする、うしろこうして

國會圖書館藏

内幣を直ぐに見ますのさるも、そんぴあるから
其力を共勝居ひなければ法列法を為行
ふことは困難ひある（因に土産ようも出す
場合にも事実品不足のことを一ツこの
を仕幾分も出して来る、番法を少倍を
叱つて又同じ様な物を出して来れなば
叱りつけて体動を粧ひとも実を内実
共謀の手ぬひあるに云ふ迄もない）

一給料をなるべく出さは不正もやふ勤勉になる
ると一ゝなり淮のも思ふことひあるが、実は

任務に勉強なるものひある、多く節禄の
あると故為をもるそんのあるに只勤法に
り高級のを生じ得ずする、又個様のことを
悪習を生ずて終に不正を生る様になる

一一方には給料の成分を積立て又一方には
利益の成分を割らすと云ふことの底を
を奨励する大も有効の方法ひある、こんを採
べき勤績を奨励するよりおりて先づ大
体に策を立て

一商品の在高の調べを大も必要ひが、主任者

に忌むべきものと、之を信ずる悪事をなくさしたる
る論者もあるどうでもこれなることこの上なき者
そこで正確なる元油をすすめつつあるところなり
木綿縮緬羽二重で常になく数を命ち
総称に数人の店員を各部を採用させて
それく元油ぐさも、其れを紙漉にて一尺
かしてみる必要ありある二年も三年も放擲
しおき唯此書価書の言あの文を信じても
至る至る売績此上なし
一 西洋でも長絵 チボ支ゆる 西洋の大英城

底でも訪る場合ま見聞して其の現場
でも駄つてなる出れる者の丈を一寸お咎ね
いかにもないことあるものさえつと高き
こ誘ない甚だ甚い数すも元庭す其人
の名誉の然るべき結果も授受すること
びある、さるくれもよの主なれ底つもの
鉄様を見做して其れを積ん又内の公益よ
業なるも之んを授ることある、よいの習慣
思はれる

○御人原宏平 高山正志の鎌倉紀行斷簡
を見て余元さんとも名流の日記を蒐集・
所掲、あるを前人を介して下望せしことあり
しが其後を望みを果す能はざりしが
頃日金の入目起りたんが手離す合の古状
東京書らるも轉送し来り兎も角もと原
こ原品の通送を結ひしにも難かりしも
遂し居るも虚ゆて見るに来るなど一見
其鎖粗すきこの也 美濃家四ツ切り位
の三ツ九紙を掛めて横巻とすし其首に

細川淀次印の題字あるも其尾に小野湖山の
題字あるも其書又小湖山の題簽を上に其
い高山正志の云稼守御日の其書あるも日記の
其跡は古法の観音は語るまじと紀す叙
法極めて周到なり全部連関して鎌倉のる
を紀するや否や未だ精読のいとまなければ知
しかたきも鎌倉日記の断簡なるを粗みべ
くも何ぞ其旅中如くの走りまとて卒業なん
とも自ら味のべきなるもあるも古日の割意
すべしとて深くなる所人古簡二通あるもて

國書刊行會

國書刊行會

云々[illegible]蛇足の書簡を[illegible]して[illegible]當個[illegible]の一考あらうか

明治四十三年四月[illegible]

附記

應之の[illegible]記　其此の一枚を[illegible]
本(?)[illegible]観音の字を[illegible]したる[illegible]の記
の[illegible]ることを[illegible]を寄せて[illegible]し他
八事[illegible] 身近山 を[illegible]ひしおりめり紀の
跡[illegible]しく荒(?)由 太閤(?)[illegible]のる
其日[illegible]え[illegible]を好みて[illegible]を[illegible]し
又、其寺の男[illegible]大坂婦人[illegible]面のさ
ま[illegible]る[illegible]の[illegible]

とを[illegible]す　翁(?)面の記[illegible]
[illegible]　[illegible]を出せは男[illegible]　翁面を
[illegible]ことを[illegible]大坂婦人翁面の[illegible]を見たれ
男[illegible]を初めて[illegible]婦人[illegible]たれ婦人の[illegible]
は[illegible]を[illegible]其[illegible]を[illegible]
[illegible]数日を[illegible]て[illegible]を入り[illegible]
[illegible]の[illegible]して[illegible]の如
[illegible]も[illegible]て[illegible]しとあす　又[illegible]
[illegible]も一枚あれは　大坂の[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]を[illegible]居る所を[illegible]條

國書刊行會

國書刊行會

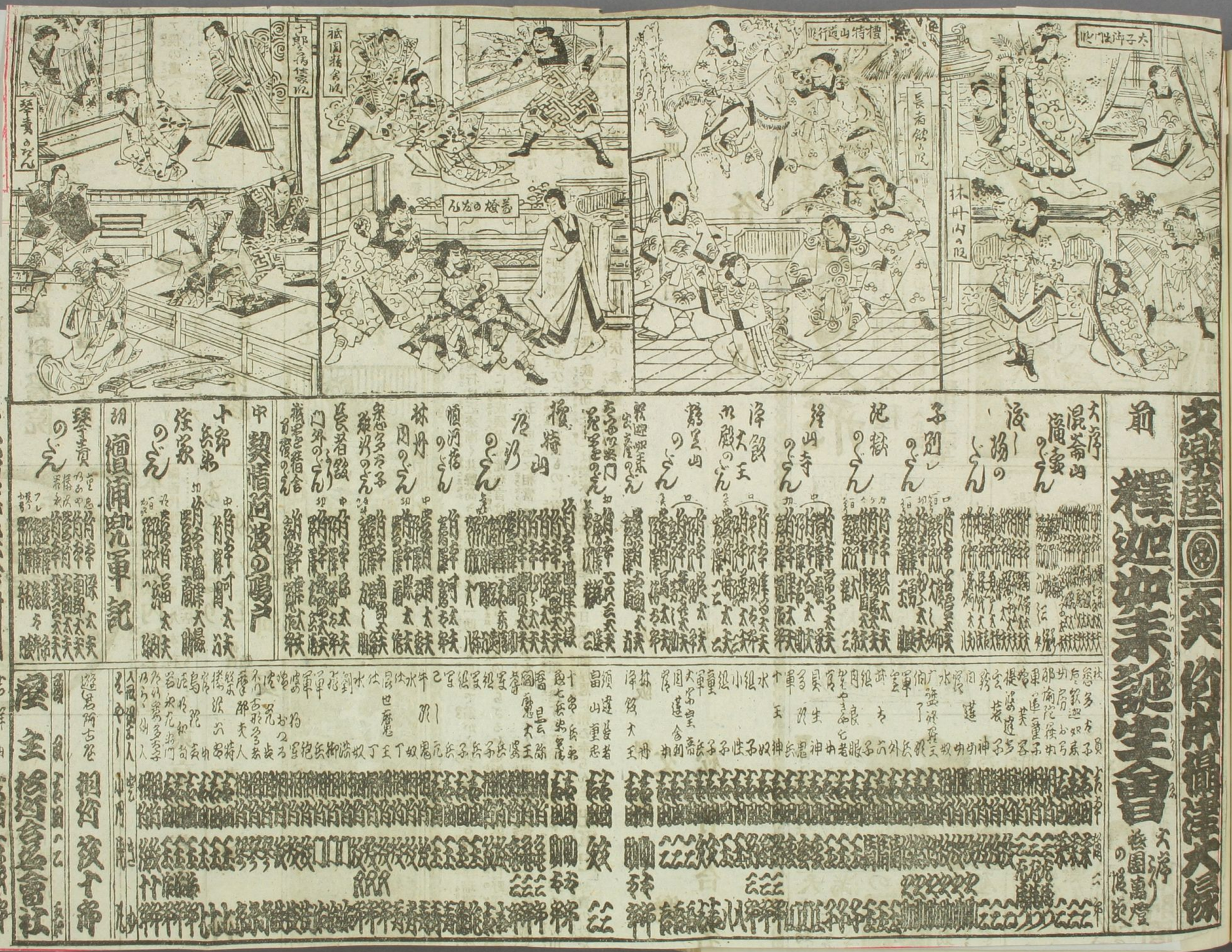
○兵庫文樂座ニ行ク本月の[illegible]
迦如來誕生會[illegible]
[illegible]
釋迦如來誕生會[illegible]
出[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

各位益々御多祥の段奉慶賀候却説弊座義四月興行は近來漸く其聲高き[illegible]
釋迦如來誕生會」を一番目狂言に据る事に相成候尤も此狂言は院本の儘にて普く世人の知らざるを遺憾と思ひ故三代目野澤吉兵衛
を達せず遺憾ながらも物故致候處本年は幸ひ同人の五十回忌に相當仕候に付生前の苦心を水泡になすも斯界の爲め甚だ殘念に候間聊
樂家一同奮發して漸く各位の御高覽に供へる運びに立至り候ものに有之殊に攝津大椽義は耳順に達する高齢をも厭はず追善の爲め檀特山
郎兵衛」住家の段と二役を受持ち御覽に供へ候又切狂言には樂家の幹部が相率ゐて日頃の御厚恩に報ゐ奉らんと「兜軍記」琴責の段を
見捨なく賑々敷御來觀の榮を賜はり度此段伏て奉懇願候

四月吉日

大阪御靈
文樂
座主
松竹合名

國書刊行會



文樂座 ◎ 大夫 行中 福津大縁

前 釋迦如来誕生會

大序 混蕃山 滝壺のだん
後し場のだん
子別しのだん
地獄のだん
経山寺のだん
浄飯大王 北殿のだん
鶴足山のだん
釋迦如来出産のだん
大子御性門 花屋のだん
檀特山 道行のだん
順河岸のだん
林丹山のだん
宋忠多太子 雅行のだん
長者館 門外のだん
祇園精舎 首授のだん
中 契情問波の鳴戸
十郎兵衛 住家のだん
初 檀浦兜軍記
琴責のだん

中秋月茶屋大入ちゃ可書目

座主 行行合巡會社

の處へ。」
しお願が有るものですから。」
けないわね、實は妾今夜宅を飛
て來ましたの。」
何してゝす。」
の聲は如何にも驚いたらしく、而
や、ア僕の處へお出なさいまし、
明日母と一緒にお歸りあすつたら
でしやう。」

廣告

四内國勸業博覽會褒賞牌受領
河内萬國大博覽會賞牌受領
登録 商標 大
前掛ヤ類
大阪平野町淀屋橋
かく大本店
電話東七八六番

堺市熊野町東一丁
轟齒科醫院
院長 轟 三次郎
診察
午前九時ヨリ
午後四時マデ
毎月一日 大祭日 休診

たんを
袪り
せきを
治す

だんせきに
淺田飴
すき腹に
めし

定價 三日分拾五錢 一週間分三十錢 十二日分五十錢
本舗 東京 大阪 堀内伊太郎
關西代理店 大阪 丸本利兵衛
全國到る處の藥店にあり

あらいはり
ゆのし
確實 勉強
うつぼ新天滿橋西詰
河安

東京生蕎麥
天滿天神表門前
更科

右今般發賣致候間多少
奉希上候
前記各店に於て販賣致候間何
むすめ印ビスケット製造元

謹啓各位益々御多祥の段奉慶賀候却説弊座義四月興行は近來漸く其聲高き近松翁研究の一助とも思出で翁が心血を濺ぎたる時代淨瑠璃の傑作
き「釋迦如來誕生會」を一番目狂言に据る事に相成候尤も此狂言は院本の儘にて普く世人の知らざるを遺憾と思ひ故三代目野澤吉兵衛
志望を遂げず遺憾ながらも物故致候處本年は幸ひ同人の五十回忌に相當仕候に付生前の苦心を水泡になすも斯界の爲め甚だ殘念に候間聊か
にて樂家一同奮發して漸く各位の御高覽に供へる運びに立至り候ものに有之殊に攝津大椽義は耳順に達する高齡をも厭はず追善の爲め檀特山
十郎兵衛」住家の段と二役を受持ち御覽に供へ候又切狂言には樂家の幹部が相率ゐて日頃の御厚恩に報ゐ奉らんと「兜軍記」琴責の段を
す御見捨なく賑々敷御來觀の榮を賜はり度此段伏て奉懇願候

四月吉日

大阪御靈文樂座

座主 松竹合名

各位

四内國勸業博覽會褒賞受領
登録 商標 大
足袋
大阪平野町淀屋橋
かく大本店
電話東七八六番

ふとん
大勉強
販賣仕候間不拘多少御用命乞
大阪市東區本町渡邊筋南へ入西側
大津屋

紺足袋各種
木綿足袋各種
キヤラコ足袋各種
布羅紗足袋各種

五月人形
◎飾具足其他
◎教育的玩具 各種
大阪市平野町淀屋橋西へ入北側
製造 おろし 小うり商
津田翫玉堂

美術
陶磁器
大勉強發賣
大阪西横堀 美術陶器陳列場
泉藤本店
電話西二千十番

販賣御望ミノ御方ハ御紹介次第早速定價表御送り申上候
大阪市せんだ御靈前
丸天足袋部
電話東弐壱七四番
振替口座大阪八三九番

天滿の赤かべ
口
大人効
小兒効

一腫肝圓は他の胃病藥の如く一時おさへ氣休め賣藥にあらず根本的全治藥なり
(主治)○胃病○溜飲○腸胃カタル○貧血症○神經病○黄胆○五疳虫○肺病○脚氣●症別て小兒癇の虫と

而つて三世野沢吉兵衛此作を新曲の上は
すんでに其苦心の果さずして逝きしを遺
憾とし其筋ゆくる吉兵衛の五十回忌に
おもむきまけこれを特に一番目に出したるや

各位

美博覽會褒賞受領
大阪市野町淀屋橋
足袋
かくと大本店
電話東七八六番

大勉強
間不拘多少御用命ヲ乞
町渡邊筋南へ入西側
大津屋

綿コ足袋各種
紗足袋各種

五月人形
◎飾具足其他
◎教育的玩具
各種
大阪市平野町淀屋橋西へ入北側
製造おろし小うり商
津田翫玉堂

美術
陶磁器
大勉強發賣
大阪西横堀
美術陶器陳列場
泉藤本店
電話西二千十番

大阪
竹村平兵衛
上ゐり肩衣
竹村文店

販賣御望ミノ御方ハ御紹介次第早速
定價表御送り申上候
大阪市せんだ御靈前
丸天足袋部
電話東貳壱七四番
振替口座大阪八三九番
強クテ為メノヨキ本店ノ特色ナリ

口中病一切ニ
天満の赤かぼ
大人効
小児効
一脾肝圓は他の胃病藥の如
一時おさへ氣休め賣藥に
らず根本的全治藥なり
(主治)○胃病○
溜飲○腸胃カタ
ル○貧血症○神
經病○黄胆○五疳虫
症○肺病○脚氣
●別て小兒癇の虫と
唱ふる病状の如き者
健胃強壯
脾肝圓
大阪天満地下町
城野清次郎

の毎ゞ文明未だ行く本月の降りこれ何

國書刊行會

此為人を魅する所以う、唯此語り方の強烈
なるを[illegible]寧ろ戦略の有り　攝津自分も戦
略に此点劣ることを自覚し居ることを云ふ　攝
津つゝ有る校友某曰く攝津は天性語の調
々と長く引くに依ゆるの力なり　然れども淨瑠
璃に於ける語を鈍く　藥雜石を取るこう
所の自家の長所を利用して一種巧妙の節
を作り出し巧みに人を魅す　人こんを戦略の
と云ふ　今く攝津の喉を一種不可思議の
喉也男子ゆゑ適はせる語をなす　某

醫師は博士うりも怪しみ翁の咽喉を拵せ
しに果して喉の辯は婦人のと同じきことの
を思ひ居ることを知るべしとなりと又藥んの
脇目を拵せしに非常に強健なることなる
ることを確かに得たりと　翁の音語の調
々なるを其の語を引くに之しきに依ゆるを
こんの為也　所謂戦略は南部や源や相によ
りては攝津を凌ぐことの多きなり　唯
此其藥ぶり長すれば某々のものに限り攝
津なるものを語るとしてぬるさるなし

國書刊行會

国書刊行會

眼科學より見たる 壺阪の澤市

醫學士新津二郎氏の談＝白內障と外部の震動＝明治の澤市＝藥師の御利益

此間から天下の視聽を集めて殆ど大阪を動亂せしめて居つた醫學大會の眼科分科會で長野縣上田町の新津二郎と云ふ人が「眼科學より見たる壺阪の澤市」と云ふ奇拔な演說をした、除り時間が短いので要領を得かねたが、後で本人の新津氏に會つて其の話を聞いて見ると大に振つてゐる此の新津と云ふ人は東京醫科大學に居つた傍ら甲賀、河本兩博士に就て五年も眼科を硏究した人で、卅八年出の醫學士である、兎や角と書を讀んで居る內に、千八百十三年に獨逸で出版されたヘール氏のダースアツゲと云ふ本に佛國のヤニン氏の實見記に、先天的失明者であつた十四歲の小兒が或時樹から落ちて

強く頭を打つた結果白內障(そこひ)を脫出して完全な

視力を得たと云ふことが書てあつたので此の事に非常の興味を以て硏究を重ねると共に、元來が歷史的に眼科を硏究して居た人だから端無く淨瑠璃でも有名な壺阪の澤市を思ひだした、所が去一月九日になつて長野縣小縣郡依田村の內尼野山庄上野嘲重(六十)と云ふ患者が來た、此の男は五十歲の時白內障に罹つて十二年間失明してゐたが同村の龍尾山龍泉寺の藥師如來は眼病の神樣なので熱心に參詣してゐる內不圖藥師堂の柱でコツン頭を打て人事不省になり夢心の裡に五六十頭の

馬が駈來る內に天女の樣な氣高い人の乘つてゐたのを見

た、翌日兩眼から頻りに淚が出て幽に太陽の光が知れる樣になり之れ必ず藥師如來の御利益と雀躍し遂に新津へ治療を受けに來たのだが其時の同人の疾患は純然たる白內障で患部が硝子體へ稍辷り落ち上部の或る部分には水氣の有るのを認め頗る奇異な感に打れて三月一日に局部を切開し垂た白內障の一部分を取除き全々諸物を識別する事が出來る樣になつた其處で佛國のヤニン氏の實見記と云ひ右の患者の事から照合して白內障なるものは

外部から非常の震動を受けた時は必ず脫出する

と云ふ事が一問題となる譯で淨瑠璃の澤市が谷間へ落ちて數年來の失明を恢復したと云ふ事も作者である團平の女房が多少此の間の消息を知つて書いたのではあるまいかと新津氏は澤市の硏究を始め今回來阪した序に南區淸水町の團平の遺族に面會し澤市の話を聞いたが既に本人が死で

るを八日午後に至り發見し傳法署より臨

ゐるので要領を得ず更に去つて

壺阪山の南法華寺に參詣

したが此處でも要領を得なかつたさうだが壺阪から八丁程東方の巖の間から淸水の流れてゐる所あるが華山院の詠に「岩をたて水をたゝへて壺阪の庭の砂子も淨土なるらん」と云ふのがあるが澤市の淨瑠璃は多分此の詠歌から定案されたものであらうと云ふ話であつた(鐵米)

國書刊行會

○余俳諧を解せず名人の集時にこれをえらぶも
今心のしるのみなし唯此一葉の句勁拔にして
天真流露余往年所得る處俳の新を
論ず因み数日愛誦而後一葉の集を
得る毎に之れを読む後者中村六印七番
日記を開改し照らる、偶々大坂の客中之
れを読むて誓を發することのこうです、即ち
今心の句十数首を抄すとなす
雑吟くや関八州を一歩にし
どこへなと我もおおへ磯の蟲

國書刊行會

そのめるまでも花さくて花木なし
朝臭も殘しばしけ再て浮世なし
古里やよるもさはるも茨此花
浮風や力一ぱいきりし
くしきまもまんと家ひけるの月
世の中よびうい寝うら先おつる
大佛や鼻の穴うら霧うら出る
肌寒やむさしの国は六十里
寝の世を得心なくてたりなくて
風嗤んと口ひなる阿み法佛なし

代々所貧乏垣の木槿うな
其の吹けぬ家をとりまく木槿ぶ
一升でいくらかおぞ霧の玉
万段の雨ぶんけふる樣うな
熱メ三十六坊　梅の花
巣の一人きげんや秋の蕚
我庵の太刀ゆゑ切る芭うな
神ゆゑも霧立のある山路うな
山霧のさつさと殺る生鬼ぶ
淋しさや蔓草うたの先祖を

國書刊行會

雪行けく都のくらけ行おらん
二月村二兵衛新田　梅の花
蕚や田舎回りくらくぶんべい
汚れ雪世界無りを解けぬ也
辻堂を不地的に借りて拝くりけり
殆の陳うくしの神にまくりけり
稲妻の打刀なき茅家ぶ
足拭手拭麻のむつましや
霞の世を押合へし合荘の花
さあまいと大に吹けしさくろぶ

國書刊行會

今見れば皆愁目なるも拈る梅
飯石の著しよりこそや裸　組
日本さばくちの綫も　さくらぬ
むぐい前や池も伸る日も伸る
雪どけや大手ひろげし立　榎
くやしくも熟柿仲間の世にへきぬ
夕立や大行燈の投光うす
度梅の実のすり鉢の坊者ぬ
亀の煤鼠の掃てくんなけり
亀の煤掃く真似をして置にけり

國書刊行會

打豆　我手こそへもなき伏家ぬ
まち立や蒜もかぶらす五十二年
かしましや江戸見た雁の帰り鉢
藪村や馬盥うくも鴨の立
うつくしやうつくしや毒木の山
川の棄漁紙をぬ果るけり
流りる日本の我を見しらぬ立
吟くな一ぞこも旅寝の秋の月
一茶もと不遇不幸の人なれば自身のおのつから
掃愉の味を第ふ、何も又こゝに有り

國書刊行會

一毛孔
中收无
邊世界

銅印二顆

巽李軒藏

吉田生遠鐫

配字苦心を觀る刻亦進境
を見る前のの比すあるなり

明治四十二年五月

十字成德

國書刊行會

一刹那
閒包無
量塵劫

國書刊行會

○高麗青磁瓶出しの器一を獲たるも那奔に
大きさ略々圓のことしるも茶
ソバ[illegible]個なるも此器茶人の振
出しなどを応用して弄び恰
[illegible]のことの[illegible]高麗の於け
[illegible]用に近くぬ人の奩具子
[illegible]ん類[illegible]さきな白粉[illegible]一
個を獲て又之んを獲たるも[illegible]あ者を匹と
まんば[illegible]お助けて[illegible]一層越あるを
[illegible]高麗の器を[illegible]四鉢の[illegible]

國書刊行會

國書刊行會

國書刊行會

なれ、きは日月薑の珍は必ずしも價の高
きものに限らん、價卑きこのひも生しめる
このは珍を為すに足る、價の高ひ事なりも
必ずしも飯味の深淺は事なく、高家も万
国のものを得ても必ずしも湯足しなれ貧
者は十国のものを得ても高者と同じ程
の快樂を感ずる、よくしたこのひある、大
坂なる物を得れこのは十數点あるから
是に換算すれば百餘日する）きんがさて
味のうつに見ると是なく飯がある

一 夜星 軸室
一 龍泉窯水盂
一 孫玉象 玄府 瑯琳室 萬曆年製
一 小九谷酒注
一 塗金花鳥 彫刻香合
一 時代のこのこの 個代張茶筆
一 高麗堀出し 奩具 掘り出し頃のこの
一 七寶杯室
一 蒔絵香壇
一 日本、大時代、佛器（被乱） 風雲の掘り

一羅漢鈕采鐫印
一古銅印 獅鈕
一曲玉四個
先づこんな形の[illegible]小さなものの[illegible]
味もなかなかに深くこれらの[illegible]
二連の[illegible]先づ不漁とも
[illegible]
○大阪毎日左の社事を掲ぐ實は此於全集
の[illegible]を考へしなるものの但し
内容は大阪地理の考えとは[illegible]の事

○近松の作を註釋したものも少くは無いが、大阪を知つた人の著は殆ど無い、故に地理風俗には見當違が多い、此點に於て今回の近松傑作全集は水谷不倒子の調べなどが有力で正鵠を得、淨瑠璃を離れて大阪史蹟の參考になると信ぜらる。

○近松時代の大阪と今日の大阪とは、地理に風俗に著しい變遷がある、町名などは維新後町々の合併で全く消滅したのが頗るある、「女殺油地獄」に、油屋與兵衛の家は、本天滿町とあつて人殺しのあつたのも同町であるが、本天滿といつても天滿では無く、今の東區伏見町二三丁目邊であるさうだ、伏見町一丁目の所は本靭町、五丁目邊は錦町で、伏見町は僅に今の四丁目邊の稱であつた。

○「冥途飛脚」に、忠兵衛が堂嶋の屋敷へ金を懷中して行かうとし、西横堀をうかうかと米屋町まで來り、エ、ま、よと新町へ走り、例の封印切をやるのであるが、此米屋町は堂嶋の事かと思ふと違ふ、今の南本町の舊名である、南本町であつてこそ忠兵衛の堂嶋へ向かず新町に走つた次第がわかるのである。

○今の京町堀は、近松の作には伏見堀と出て居る、「宵庚申」の靭油掛町といふは、今の靭南通である、中の嶋でも昔とちがふ、維新前までは難波橋は劍先觸れず南から北へ一つ橋になつて居たさうだ、淀屋橋の上に旃檀木橋といふのがあつたことは、「お龜與兵衛」の道行などにも出て居る。

○北新地も去年の火事で大變遷となつたが、近松時代の北新地は昨今の曾根崎新地ではない、「曾根崎心中」に、天滿屋お初は蜆川の遊女とあつても、當時は曾根崎は新地といふ場所になつては居ない、當時蜆川といふのは、蜆川の南濱から堂嶋一圓を北新地と言つた處で、堂嶋一二丁目から梅田橋邊まで遊女町であつた、斯樣に大阪地理風俗歷史の參考としても近松傑作全集は興味がある、記者は特にその註釋が此點に注意したのを多とす。

實也

國書刊行會

能樂源流表彰會の趣意

能樂は、日本文藝の一英華にして、國民風俗の大精粹なり。其の英華は永年に渉りて愈光輝の色を加へ、其の精粹は四方に廣まりて普く和樂の實を見る、斯の道や亦盛んなりと謂ふべし。茲に、早稻田大學圖書館は、斯道翼賛の微意を以て、源流表彰の大會を催し、敢て大方の同情を請はんとす。

抑、能樂は世に專業の家あり、又、傳習、賞翫の人多し。而も、其の現在に於ける藝術上の對比を考へて、維持の方略を立て、又、過去に溯源して興敗の跡を明かにし、未來に期待して發展の途を求むる等の事に至りては、盡さざる所あり、遺憾を免れず。曩に、早稻田謠曲研究會の小集ありしより、此事稍世の注目を牽き、遂に斯道大成の祖たる世阿彌元清の遺書發行を見るに至りしは、時運最も喜ぶべし。則、本圖書館は、世阿彌の當時、諸座興隆し、以て五百年後の今日に、能樂を傳ふる偉蹟を景仰し、幸に大家名士の賛助を得て、源流表彰の大會を爲す者なり。

大會の順序は、曰く能樂演奏、曰く遺物展覽、曰く表彰講演、其の日時、細目は別に記する如し。而して、收入の淨財は、雜費を差し引き、餘剩あらば、之を本館圖書卷册添加の資金に供せんと欲す。大方の各位、必、此の能樂源流表彰の本意と、圖書增殖募入の宿願を併せ嘉納し、同感の仁心を以て、來會したまはらんことを希ふ。

明治四十三年五月　日

早稻田大學圖書館

國書刊行會

國立中央圖書館刊行會

[illegible]

明治四十三年五月
八日大隈大姫子の
伴して霞山と登
延暦等に於て佛
画古文書二種の
寶什を観る中
又古銅印三顆法
別しあるも、印影
八表ゆくに見る所
なんど実顆を

國書刊行會

延暦
寺

延暦
寺

國書刊行會

見ることを初めて也寺僧ハ詩ハ印影数多
を得同好ハ頒ちんと難す、こゝに収ちまゝの
則ち是ん也

○五月六日ゟ七日迄京都ニ在り伝ゝ荒井書
店を経て若干の図書を購ふ

一全七十論　上中下　三冊

注者仕立のことの書物仕立と
二種あるこん書物仕立のことの

國書刊行會

其尾題後（活段）

其再興　佛說一切姫菴

今上皇帝　玉體安穩

東照權現　倍增威光

征夷大將軍左大臣源家光公武運長久

四海恭平　四家擧鏡

佛法紹隆　利益無窮

日本武州江戸東叡山

山門三院執行探題前毘沙門堂別當

大僧正天海敬主一

寛永十四年丁丑暦十二月十七日

林氏幸宿花溪長士拜行

元乃ち寛永法字本天海版とこゝふこの、今や

御くこれ等も稱觀寺の内の入らんとす

古文書一其

安永三年正月五日付

藤原朝臣均光

可從五位下の宣旨

原書（全く高的の新式其儀

略を叙するものは浦上を望る
嵐山の大堰川を挽ひ獲ふる
也と誌す
器や皿や徳などの精良を執て
又凡は其生前飾物稅屬し
て男子接物器類異なしと推せる
る
石を里するなる茶をばもるも光
深めるまでよく、今浦家なるも
出ぬりと西瓜なるなど、つやくして

國書刊行會

快よく美しい
石の能を一方に大山あるも左側に平
板なる所あるも白紙土坡の頭を為
す
跡を嫌しきに庵の真平なる家
も凹凸缺漏なきなり
日本の印材となるべき石材を
吾も机上の玩具となる此般の石
材を強ち支那に譲らず之れ其
の譲とすべきものゝ一つ

國書刊行會

價二十四貫ニ[illegible]廉なんとも嫌ひ入
る

○伯の京都来趣を拵くして下村大丸鳥丸邸に
伯を[illegible]を拵こんと雖し接待設備日を拵識
す余も其の帷幕の内にあるも、いろ〳〵お話を
したが程時々に[illegible]居する而長き設備をて
思ひつくべくもあらず結局大丸に無虚に拵
のいろ〳〵の姿態を画かさしことの五十隻
あることを少さ出し、そん取中の伯を数つ

うす表面まで屋上の状料なり、門の右
よりも此十間も狭き路次の両側に立て
て豊公碇硼の取るに攪し玄関を上りて
奥性変りまゝの通路にあるる各部屋
部屋の両側にもこんを立て終に伯の性変
こる本性変に迄及はずして他の屋
風を交ふ可らずと試人に屋風を點拵
するに文化文政あるりに作りたるものゝ大
丸にも並屋風と云ふ意よりも並拵屋
風と云ひおるものしなるものゝ

は今年七十三ゝなるそうなるぞの其の流離の
さまたる壯者も如何の根のある、此の國人と
伯を殺人と同年にあるが、伯のかき唐衣
の振袖は此の婦人を出しかなれば伯と云ひ其
と云ひ名人を見て其を[illegible]と云ひさを
得ない、其の年を[illegible]へれときは伯もうれ
え氣物の名を[illegible]（擅才の）なることこの出来ぬ
との成笑を與へれ
此上いろくの流の序に紫宸殿の流の出
れ徐々得る事ならの此の服壯元の流も出

れ、余伯は聞く、聞ては冬紙とうたんれば
来常して冬雨さんまりしれば伯四ヶ年
衣冠を着けていくこれも冬雨しれ、そんな
就き隨分奇語もある高まるなるを冠
の纓ゝ紫色を用へる、こんな天子なるも
と知れる、あるとき冬雨なると寒むくッ
て溜る所のら[illegible]溜り不の火鉢は雨股
を擴けて暖を取りて居ると纓ゝ垂んて
そる所うるいのつしゝ火はへりて或得の
焚けれのことを聞にしれ、已むなくツキ今

國書刊行會

ハしに相違しにこともある、奥さんのお服
は矢張り其後十二一亦ぶありましに回て
ハイ夫人又回て其後の矢張はまこ
とは朝の早いのが困りましに儀式のお
の参内は午前二時ひしに夫人又回て男
子の礼服も世子の礼服も着ることあり
く而例のことのが迚も其の人がの業は未
へりこ存ずすのが其道の人を家は目指く
ておきましに
引きこの出に大鯛をこくり又は伯回て矢張

(文雄)と云ふ男は謹厳な男にいのときし
其策をやるを新寺く一所は往つに於此の
二倍も取る鯛を出しにぶ矢張はもきそうも
着を着けて山サく哈ひもじめにの目で
あるがこうこうにことがある
伯回て吾輩の家都の居はもとこゝ中村様
にあるが矢張う考うて来て大可(矢張の居)
ハ近に新築を致しましにつき是に一
回にて一夕ゆるも叩拝居を新ひにいと
折角云ふて中村様は為相をあつけに

まく泊つれことがある、朝早く起きて楊子
をつかひなさる同じ家の前樓を望むと飯
帳が釣つてある、着て居る間に云ふ女が
常ひも志どろに飯帳の前にあらはん出れ
そこであるとうらいづん男が現かんまひあらう
と、面白半分に高地まるく待つて居ると
漸やく出て来れ男は誰んあらう、そん日
まさに歳男一方の男とのみ思つて居つれ
矢明びあつれまさく一驚を喫しれ
夫人傍らしも曰く矢明さんは子まひ生

ませなさつれことは私も知つて居るかに一
向ひれしども知れぬと思つて居らゞし
るとえく此の事は旅館にお出になるも前年
印度にあつれあるこの小さな事も今は大
きくなりましれとお話しになりましれ私
は其の時鈴ッ程どそんなとなれの子で沛
立のまゝと思お居らうして又れこうつれと
一世笑ひ崩んれり
○泊は比叡登山を思ひ立れんれのぞ自分も陪
従した校反も二十人ほど随ひしれ為めに血

國書刊行會
國書刊行會

十八元こうもの行列とあつれ、坂本まゐりは二人
曳の腕車を駆つれこうそんらも上は車の
きこうぬ先づ延暦寺まで三寄りて見ると感ん
る顔(印)設備の出来て居りて緑つまれ作
つてあつれ、寥おもいろ〳〵陣列してあつれこ
一々競賞のいとまゐが無かつれ殘念
である、例の延暦古銅印も陣列してあつ
れこうふ、こん丈は紀念のなる数多の捺して
貴つれ其の印影を前の掲げとるとが
ある、坂本よりも根本中堂まで里程廿五町

ありて峻坂もある伯は愛長の乗物、天上風
のお乗り夫人は長棒に乗らんとて
山輿に舁かんとりも(他の)三十名ばかりの連中は
徒歩にて従ひしが、山まをおのづから登山
日の機械に出来て居るそんな木の棒のさきに
腰を押す横の木こう禁置してあつて登山者
の背後よりも安来の者が北の棒を腰にあ
てがひ徐々に推す横にして行くのであるが登
るまでいくぶん楽を感ずるとこふすれば、案
内の僧の話しに、北山の大劉奢利とうるうまで

比叡山の領域を一日二十里徒歩して山々を巡らる
けんばなるゝ也、それを惜しげ無く年々續而百回不
とも積めば阿闍梨に進むことを得来る、其の
協会といくびく労を有つて居るそれれコンなる
勝おいしを云ふ機械の出来ぬのひ、家をと
和尚の僧のみ用ゐることのであつたと識云ふを
ふさき殿下両其く戒しむ、夫人なこんな話を
ふさうん紀念すると二本むらも贈らひ受けら
れたり

根本中堂に至るまで峻坂をあるとか高野に比
すれば道を道らしくたりて居るのみなるが
坂もいくらか楽な様に思われば高野と枠
樹日天を蔽ひ白昼森落闇き
とするが叡山を去る際なく剣
よ陰氣である、それに比琶湖を瞰下する
疏絶を居るを居らず風光を綸叡山
のよいうるるしい、併し高野の風趣を何
れうと云へば高野と云へもあると謂ひさるを得な
い

根本中堂を信長の兵燹に罹り焼れたのを

國書刊行會

二代均軍ゞ再建し三代均軍の時に出来れの
びある歴史上やうましい事ひあるうち、こゝに
来ると云の可らざる高崇の城に打とくも
むかしは谷田に地の中に人を入れたれば
住ありのびあるゞ云ひ特別に殿上まで
昇賢るを許せられ、佛壇を正面に恰ひて
伯夫妻の初め一日ぬくつきおすれば幾十
僧侶佛ひれの者し居るの誤死の
聖日八遠く脚下にも起る、後に闇中をの
ぞきそれは僧に皆る佛壇の追うれ下に在

り、あらし天子（此者は）親臨ましまあらせられ
ぬるよりも佛壇の正面に打敷して所のるなり
此の設けある次第なりと申さ申されあるに
こゝに載しこゝり
ふかき伯の祭ひにつき前年伯の社事にし献
せられ、蓮の葉に藕然を以て風り出せ
る小さき観音の像ある葉の羅を厨子に入
れ伯の坐不出てのて置きぬり伯夫婦にこん
の勤しても一拝せられこゝり此のマンダラは八
十八枚風れ特に名刹を選ひて寄附せられ

國書刊行會

國書刊行會

國書刊行會

俗も相和して吾々の家へ来たりしは小僧
であるけれど大分エラクなりしは、まだ流石にお
年の代をなる俗天晴の評まで横着ことの
相方も頭を捲きあるくばかりは今なりては
こまるぬと共笑しけれども一旦つひあるけれ
○とかの伯の旅行は空前の人氣を博しけれ
自分も伯に随行して為に関西あらゆる来たれ
こともあるべが此方のことく歓迎の盛んな
ことは無い、これは元来漸く潮謝しけれぬめ
でもあらう、伯の政黨関係を離れさぬめも

あらう、世の中の道おしけれぬめもあらう、何
んなりても此事のことである、伯の不自由の身
を提げて當人の利慮公務に能くする精力
を以つて寛容かずは時間の許す限り招きを
応じて趣味ある議論をなす目は碇なる
一般の同情を得する所以ひあらう、伯の乗
ハ近年ますまつく阿と入つたのみならず
傲者ともすんば高路者を罵り人を傲
るの氣合を漸く和らき論語を合とす
ることとも亦同情を惹く所以ひあらう

國書刊行會

國書刊行會

此頃の勧通を受くるの故[illegible]を[illegible]て[illegible]
七郎グラッドストーンを悪犯するも自然ひ
あるまじ伯は氣魄の上に於て数理の[illegible]
を伯のるに上に於て言論に力あるに上に於て
よくグ[illegible]に似て居る大政治家なるに上に
於て[illegible]勿論のるも、併し其の多方面に亞
通の利くに上に[illegible]の[illegible]
[illegible]の及ぶ所のあるのみも又伯の人氣
を持する所以であるべし
○大坂の[illegible]力を[illegible]朝日も伯を頌する

に活ける四寶を云へりまことに然れば伯
一人の[illegible]力を或る意味に於て政府
に匹敵す伯の一言一句も外国の政治的思
潮を左右するの力ありと
○伯高野山に登る山路のこの之れを聴
き急早く登山し伯の来るを待つこの
[illegible]石名を及ぶ伯の到るを待つて一
斉に拝す恰も佛に[illegible]ることし伯
[illegible]手を許す群衆驚き
伯の手に觸れるを一世の光栄とし[illegible]

國書刊行會

感恩の流々咽ぶこの時も　新らしき絹巾
を以つて伯[illegible]を觸れる手を繁待し四
人への立上の土産をうとて　恵如あるも
ひとしれ　大河登山の往事を想ひ
伯自ら回りて　アルを傲れ　金剛峯寺
の元寺に所す一山の僧徒をあつ
めて一場の法論をなす、こんなくの方大
師の人も新くあるしなるんと恵ひ
起し世ろれ出家寺の我々打たれたりと
左も知らるん伯の熱心なる侍者旅行を

大師の侍者が脚を比すべく伯の受ける所
なるの歓迎も亦大師宗門の刻勇なる
歓迎さんとなるを比すべし、否な歓迎前
者は同一とすべく後者は即ち水流は
起なるこのあらん、伯下山の後一川皆回
く伯は[illegible]事実上大師也　請如之
しかり大師伯と云いんと
日金剛峯寺（遠照光淳）伯文書の登山を充策とし　焼
るれ小厨なる又れたる佛像一基を以てす伯
帰段の忌釈地帰法房とせるこんを見る、厨

國書刊行會
國書刊行會

子の表面に漆書する文によれば後形尾境の
息女の自刻にうくるとあるも頗る美作也
厨子に元禄某年の銘あるも其並を刻みくる
者の銘と見えけるも伯天要に元ってそ
好紀念物也
○伯の旅行はいつも大祝模也一行凡そ十数
人途中に加りたるの叡十数人練り出さま
は完然大名行列也随て多くの経費を要
す高野上下の駕は就のみなれども二万円に
上りたりこれ三十人前の料金なるに

純然なる随行賞を此内一半に過ぎれ而の
も伯は是差別に拂をなしてうくりみず
の伯の大名旅行を伯の居乗れ中心之んを
快とするに似たるも大坂経済会の当夜控室
に多数の同人に囲まれ伯自うに曰く無聊
は愛ぐると無きも出れば凡そ大名旅行
をみす無持は却つて否とすべ（中に若
田平太郎あるも伯平太郎を指して微笑し）
どこ無持の癖に無持にこそして金を
つらふと一笑す

國書刊行會

○大坂徳倫会に根うんくる事故余の隣家
に滝(遠)義郎あるも大坂の収税長也曾
つて所得に収税長たりしことあり余故に
相談る、義郎曰く明治十一年伯大義郎
ことにし時隠れしに数ヶ日経て出張条
業を元調べとることあるも其際各所の条
柄などを実査するに当り徒歩し居ること
とも多くうらしいが、いつも伯の健脚すれば
随行員舌を捲きたりと語る余の次家と
伯ありも此言を伯に通ず、伯一笑す、伯の

國書刊行會

體格に於て精力に於て健脚たるべき人、而
して今此の誤を吹きて果して伯の健脚を
試す
知ることを得たるも
○伯の精力絶倫時事の許す限り学ぶ故
きに(でも)快よく受け渋説をせる旨のことを
ると伯も和学の男に於んかるかに見る、自
分ながら頭も労をかけたれ氣と毒と
思ひて斟酌をしたこともあるに於て宣しき伯
を人にして一向骨折と思ひて云へば伯の大勢
をれ手に接論するに一種の名手なるあるの

高野山上にたゞずむ大隈伯夫婦

○仰の事段
ニ付自今も
いろしの分
に相待を受
けたいが大切

び蓋めましいのを、テーブル
フラワーの事もひとつ一事
ひとつ、餘りも充分と云ひ
ない分事ひ俗さんと分に
ひも此事牡丹の花なひが

フンジに餘らん、東京あたりでは正月の飾り
ものなの事、聊の仕用する日蔭がづら、ことに
旅館のごとくに場の中央を埋むるに
は用へられて居る、コンナことは東京にて
ひき容易に出来ないに花しこんをあるとす
んはこんのなるに或因ゆくに一人前の分事
を塔類に移らなくなる如何なるに、切論大切
市に飾る菊花の所なる諸君をあらば、牡丹
の花の菊花を皆池田にも持込むのひ
池田にそのことも云ふて牡丹の菊木を見す

黄鐵山印

四田宮浦横岩一

日的橋長弟に獲ると日光能承を訪ふ
視めくる[illegible]に敷家つなきに[illegible]行
[illegible]
書温泉にて殊に無くべし[illegible]の題答
[illegible]、又旅宮撰を[illegible]の一助とすれば
迄る歟

明治四十二年五月十五日於東都橋家
誌

國書刊行會

國書刊行會

○山陽外田会社山形一幅

山内容弟舊荷

山陽山を画き外田樹木人家を画こる
古人の題詞あるも山陽の山霸氣紙に
溢ん殊に風韻あるも筆者[illegible]
書自弟の題答あるも[illegible]
く一万円を投じて獲たるとす
○[illegible]人曰く今の[illegible]
家の子也支峯の人にして支峰ことに女の配
と[illegible]の[illegible]の[illegible]もと

竹本大隅太夫

豐澤團平

大阪市西區南堀江通壹丁目九番地

竹本伊達太夫

☛ この裏を見られよ ☚

當九五月一日ヨリ

堀江市又側堀江座ニ於テ人形入浄瑠璃

南の側 堀江座 大夫 浄瑠璃大夫

前 碁太平記白石噺 夢のだんの吉原揚屋迄

大序 夢のだん

由井ケ濱のだん

石堂敍のだん

昭和の虎 正名又ハ 吉原の大夫 のだん

田植のだん

逢井村 与茂作住家のだん

浅草 雷門のだん

彩吉原揚屋 賀藤野新家のだん

初 本朝廿四孝 桔梗ケ原より奥山殿まで

桔梗ケ原のだん

目原揚下駄のだん

勘助住家の元 二味線

目原揚上使 法抱復しのだん

十種香のだん

奥山殿のだん

座主 木津谷吉兵衛

大阪南区橋水専二條ヒ一角 廣田八千堂版

電話西九百廿七番

大阪天神橋北詰北回英舎印行

玉の聲

此玉の聲は近來の發明にては無く。往昔名高かりし美音家某が永年心を籠め。種々に骨折し見たる上。平常用ひ居りしかば。一入音聲の美しくなりしを以て其頃に聲をつかひし人々は。遠近に聞へ聞きて。これを求め用ひ。評判最もよかりし品なるが。惜いかな其製法を秘密にせしが故。發明者某世を去りしと共に。あたら名法も今日迄埋もれし玉となりてありしを。先頃不斗此製法書を得たるに依り。今度世に賣り弘め。音聲をつかふ人々の御愛用を願ふに至りぬ。音聲家は世評にも「聲」で能く聲の出るを尊ぶものなるが。此玉の聲は流石に昔の大家が苦心したるだけありて。腹を丈夫にし。息をつかせ。咽喉を潤すこと妙なり。音聲をつかふ諸君は必ず用ひざるべからず。又玉の聲は藥にあらずして多量の滋養分に富み。且つ風味も極めて雅なれば。茶。コーヒー。牛乳などの。代常用せらるれば最もよし。論より證據。現今ての大家と稱らるゝ左の諸君ぞ。此玉の聲を愛用せらるゝを見て。うかと美音となるかを知り給ふべし

玉の聲を愛用せらるゝ音聲家の主なる諸氏は左の如し

竹本攝津大掾丈　東京竹本朝大夫丈
竹本大隅大夫丈　中村雁次郎丈
竹本越路大夫丈　片岡仁左衛門丈
竹本春子大夫丈
竹本伊達大夫丈　豐竹呂昇嬢

此他藝苑諸大家の賛讃愛用を受け居ることをびたゝ

略す

飲用法

粉末製

玉の聲を用ゆるには。凡そ五匁ほどの熱き白湯にて能く溶かし。飲加減にさせして用ゆ。音聲をつかふ十分時間ほど前に用ゆれば尤もよし。又長時間聲を出さんとするときには。中途にて用ゆるもよし。平常絶えず用ゆれば。殊更美音聲を出すこと妙なり

砂糖を交せて飲めば一層妙味あり。又一回分にて飲み足らぬと思召さば適宜に増すもよろし

定價　三回分袋入　金拾錢　入回分箱入　金貳拾錢
　　廿五回分全上　金五拾錢　五拾回分鴻呑付　金壹圓

押形製

此玉の聲は美麗なる雛入とせる「押形」の物もあり口中にて溶かし飲めば咽をよく潤す。此品は宴席或は旅行携帯用に便利なり

定價　一拾貳個美麗入　金貳拾五錢

製造元　浪華　伊藤玉聲殿

大阪市東區伏見町堺筋角
谷回春堂　電話東四五八番

特約
大阪市東區平野町堺筋
丹平商會　電話東一〇三七番

店
大阪市南區大寶寺町東之町
菓子卸商　藤田善助　電話南三〇八番

全國到る所の藥店幷に菓子店にあり

最も完全なる

めぞ赤がら

改良

初がり

の時
羽間手數量調合は
の程になく壹羽の分
如くて烏賊の
眞黒に艶よく染上る事確かふ

定價一劑金貳拾錢
一劑にて女手なれば三四回分の染めます

發明製造人
藥劑師　尾上德藏

製造元　谷回春堂商店
大阪伏見町

販賣　日の出商會
手一　堺筋同伏見町角

毛改良に煩はしき手數を省き毛質に刺戟を與へず染まる事輕便にして害なく洗ひ落しも容易なる事なり
一、毛髮は勿論其他羽毛類の染めも美しく染まる事
一、本品は新發明の粉末にして比類なき特効ありて
一、他藥のごとく毒劇ならず
一、白髮少きは勿論
一、如何黒色紫色に染まるとも
一、染法は別紙に詳記す

一書肆のおんなるのゝ、紙てうすまうら版行を
断られた其事排も時間を能くしてこそ
である作をぬすまう術もうし稼がれても直く
には之を流する、紙うすいくら流れても喰
の都合がつくらぬことの日ある、そこで出前
ら市路ちものの流を得さんば従くと
う来流しをるダメとをことを、さあ
見たつけれども、来るいくら売れの
とくあちらこちらのをも板行の事

硯滴

大隈伯は大阪へ着くとスグ教育會とか何とかいふ先生から演説の請求を受けて、好矣好矣、我輩は何時でもやるが市嶋に訊いてくれ、市嶋がいゝといつたら何時でもやると大元氣だ▲此調子で昨日は午前中に堺で三回、午後から夜にかけて大阪で四回、都合七回の演説をした、一回毎に全然異つた階級の聽衆を相手に、よくもマアあんなに饒舌れたものだ何しろエライ▲が流石の老伯も名古屋の奥田正香の招待會で御馳走攻りに聞かされた長唄には餘程參つたと見え、大阪でも堺でもあれにはあてられた、あれが本當の長唄だらうと屢々こぼして居た▲大概の事にはびく〳〵ともせぬ老伯をこうもへこました長唄はゐらいものだ▲併し行く〳〵として可ならざるなき伯の舌鋒は聞いて居ても小氣味がいゝ、大阪ホテルでは無論市長問題が話頭に上る、サアニ、適任者を無理に引つ張つて來ねばダメだ強制的に引つ張り出すに限ると雜作もない▲堺に行つては宅徳平を捕へて、築港はドウだ、水と風に對する設備はいゝかナニ、不充分だ一体日本には水利學者が一人も居ない、築港でもやるとするとすぐ土木の技師を雇つてくるといふ始末だからどうも充分にイカヌよ▲女子大學卒業生とかいふ泉南郡のお嬢さんが二三人罷りツン出て名乘りを揚げると、何年の卒業か、貴女が去年、貴女は今年、さうさう此間卒業式でお目にかゝつた樣だね▲伯は三十年許前堺に來て大晃寺とかに泊つた事があるさうだ、其後此寺の坊さんが毎年早稻田にやつて來て酒を呑んでは氣焰を吐いて行く▲だから久しく堺には來ないが堺とは當に親密の間柄だと演説會の劈頭第一に堺の衆を喜ばせたお手並なぞそれは〳〵鮮なものであつた

國書刊行會

國書刊行會

干與する所有し 知るを今の六朝の書を学ぶ
ものは其姓を飽けば似たんとて 月若しく終る
一位の事を作るを見る 完ぶるは拙くなるもと思
人得意の説と見へたるも
見人全を見る一見四段のことに 意も城
府を開くは 寄生三的の称るを以
らず 言ふる 悦之 通稿 の山形西
を惠まる
一 修正事を三ならば訪のて 唐晩印 狗鈕
一を雑ふ

文に云ふ 游戯

又 東穂義人の書編一巻を贈ふ
寺坂平左衛門 大石良恭 菅谷半之丞
[illegible] 太夫 武林唯七 吉田忠左衛
大石内蔵之助
義士の書編十巻ハ 上仮事也 北堂七月

國書刊行會

中に偽者にすぎとを如きす吉雅の二三通
真跡とるべきものなり仍て嫌ひ入る、真
偽を物事の後（更なり）考へんと雅す
○廉田藤七 此ほど支那に拠るも若干の書
を圖らしいべくる、往々見れば念心の書院
の人の拉し云ふ事をなる僅々に印譜二
種を嫌めて物へる
（五月廿一日）
蒼茫獨立楊印（廷）二冊
多く西冷諸家の印を收む
見るべきものあらず

第庵 編

十八羅漢等名古磚印玩 一冊
此書鈍金の刊所
玉芝前光緒丙午六月の序に曰く
前畧 唐皮日休像贊著其名凡十八
故世称十八羅漢云余性間淺去真去
事時玩印石試取羅漢等名倩鈍
金刊之適邑中修塔以即塔下殘磚
刻尊名於上亦為人之所不為矣云々

國書刊行會

以下全て

白　紙

國書刊行會